

## 経験と学理

見識とは経験と学理（学問上の原理や理論）が醸し出す芳香である。渋沢栄一は、「すべて事業の盛衰は学理と実際の適合すると否とに在る」（『渋沢栄一訓言集』 p 169）と、経験と学理の調和を説いている。しかし、得てして人は経験に傾いたり、あるいは学理に傾いたりしてしまう。

事務をひとつ執るのも、あるいは来客と談話するのも、いずれの経験も生きた学問となる。生きていること自体が経験を積んでいることであるから、人は死ぬまで学問をしていることになる。しかし、経験のみに頼るとかく応用の範囲が狭くなり、事がたまたま上手く行く場合などがあって合理的根拠を有しないことがある。

一つの経験は絶対的な根拠とはなり得ず、経験のみで判断することは、結局勘に頼ることになってしまう。それは場当たりの経営を誘い、また、あらゆる判断が一人に集中するワンマン経営になって後継者が育たなくなる。経験に合理的な根拠を賦与しなければ応用の範囲は狭くなり、合理的根拠がなければ真理の絶対を保証することが出来ないのである。

一方、学理（理屈）のみでは複雑な社会の事物に対応できず、学理通りに行おうとすると現場は混乱する。実際の現場には意外なことや不合理なことが多いからである。学理は必要であるが、その学理は現実に対処するための学理であって、学理のために現実があるのではないことを肝に銘じておかねばならない。経営学の専門家に経営を行わせると失敗すると言われる所以である。

譬えて言えば、経験は実地を歩行するようなものであり、学理は地図を見るようなものである。目的地に到達するには地図を見ているだけでは到達しないし、実地に歩行しているのみでは迷ってしまう。地図を見ながら実地を歩行することが、迷わず目的地に到達する方法である。

実業家が経験を重視して学を疎んじても、学者が学に溺れて現実を軽んじても、いずれも目的地には到達しない。ところが、教科書どおりの学理を実地に押しつけようとする指導者がいる。現場を知らず、また知ろうともしないし、自分で箸を取ろうとしない指導者にその傾向がある。得てして高等教育を受けている彼らは、コンサルタントに頼り、そのアドバイスを鵜呑みにする癖がある。理屈に弱く、学理偏重の性質をもっているからである。これでは現場と乖離し、現場の混乱を招くのみとなるばかりか、組織を壊すことに繋がってしまう。

理論と現実、学問と事業とが相互に並行して発達しないと、企業の発展も国家の真の興隆も期し得ないのである。